

随筆**ヒヌカン (火の神)**

副会長 安谷屋 幸 助

困った、困ったと思いながら残る日も少なくなってきた。新居に引っ越して2週間、家財道具、食器もかたづけ3度の食事もうやく平常に戻ってきた。

旧盆も来週となりいよいよヒヌカンを設置しないと、女房から催促がきそうである。我が家に来た女性たちはキッチン談義の後、決まってヒヌカンの話となる。

思えばヒヌカンとの出会いは長い。実家は30数年前までシンメナービ用かまどが1つ、普通のカマドが2つのレンガ作りの3つのカマドがあった。その並んだ3つ目の右上の壁に木製の小さな台が備え付けられその上に、小さな香炉と酒コップと塩がぽつんと置かれていた。

そして旧暦の1日、15日と節目の日にはだいたい母が見上げるように座って何かを拝んでいた。今はそのカマドもステンレス製の流し台に変わり、ガスコンロが置かれ、壁はタイル張りとなっている。しかし、ヒヌカンだけは木製の台がステンレスに変わりはしたが、香炉、コップ、塩は以前と同じだが花生けが追加されている。そして母無き後も嫁達が揃ってヒヌカンに手を合わせる。ただ、フランス人の長男嫁だけは、沖縄に来た時には拝むが説明するのに大変である。

ヒヌカンは元々、カマドその物を拝んでいたが燃料の変遷に伴って、台所が著しく変化した結果、陶製の香炉を置いて火の神を象徴とするようになったとのことである。昔はヒヌカンのスペースまで考えてカマドを作ったのかうまく配置されている。

話を我が家のヒヌカンに戻すと、キッチンを対面式にした為、壁部分が少なくヒヌカンを取り付けるスペースが無いのである。設計時点で考えていたレンジフード側の壁はフードの開閉範囲で邪魔になり、シンク側はふきんが下げられている。

オール電化にした為、火の使用は無いが女房にとってはやはりヒヌカンは必要とのことである。今は仮のヒヌカン(水、塩、万年竹)をカウンターに置き、毎朝水をお供えている。

生活様式が変わり昔の信仰、風習は風化する傾向にあるがまだ今の世代の女性までは母親の教えが生きている感がある。しかし次の世代つまり、娘の世代に受け継がれていくかは分からない。

糸満の瀬戸物屋でステンレス製のヒヌカンの台が販売されていると聞いたときは、やっぱりウミンチュの町だと感心した。何事も簡素化され便利が優先する時代に母から娘へ伝える沖縄の風習は多いが、ヒヌカンもその一つだと思うこの頃である。

ヒヌカンの取り付けの日も少なくなってきたが、私の担当の随筆の原稿提出も日がなくなってきた、ヒヌカンに知恵をお願いして早めにかくとするか“あーうーとおーとう”

